



伊勢神宮から北海道神宮へと

高橋 司 たかはし・つかさ

弁護士。1963年生まれ。北海道大学大学院法学研究科修了。
「公事宿法律事務所」代表。

令和5年の春を迎え、私は立て続けに法律事務所と自宅の引っ越しを行った。途方もない時間がかかるつ越し準備や引っ越し後の片付けなどをを行うことで令和5年の上半期を終えてしまつたというのが正直な感想である。年明けからさまざまな出来事がありながらも、なんとか引っ越しを終えることができたのは、私を支えてくれた多くの

お守りをお渡ししたいという気持ちも募り、できる限り早く伊勢神宮を参拝し、お守りをいたたく形でお礼の気持ちをお伝えしたいと心はじめて伊勢神宮を参拝したのは今から20年ほど前になる。そのころは外宮や内宮のそれぞれの正宮を参拝するのが精一杯であったが、まもなく、内宮に瀧祭神という名のお社があり、同所を最初に参拝しなければ、氏名不詳の「名無しの権兵衛」として参拝しているに過ぎないことがわかり、翌年からは、外宮正宮、内宮瀧祭神、内宮正宮の順で参拝してきた。さらに、数年前からは、それぞれの正宮を参拝した後、外宮では、正宮に次ぐお宮（別宮）である多賀宮（たかのみや）、土宮（つちのみや）、風宮（かぜのみや）を参拝し、内宮では、同じく風日祈宮（かざひのみのみや）、荒祭宮（あらまつりのみや）を参拝するようになつた。そして、2年ほど前からは、内宮の宇治橋を渡る前に猿田彦神社を参拝した上で内宮に向かうようになつた。いすれは、外宮や内宮の域外にある別宮（月讀宮、瀧原宮、伊雜宮、倭姫宮、月夜見宮）をも参拝したいと思つてゐる。

方々のおかげであつた。だからこそ、彼らや彼らのご家族に伊勢神宮のお守りをお渡ししたいという気持ちを参拝し、お守りをいたたく形で、6月下旬に伊勢神宮を参拝した。はじめて伊勢神宮を参拝したのは今から20年ほど前になる。そのころは外宮や内宮のそれぞれの正宮を参拝するのが精一杯であったが、まもなく、内宮に瀧祭神という名のお社があり、同所を最初に参拝しなければ、氏名不詳の「名無しの権兵衛」として参拝しているに過ぎないことがわかり、翌年からは、外宮正宮、内宮瀧祭神、内宮正宮の順で参拝してきた。さらに、数年前からは、それぞれの正宮を参拝した後、外宮では、正宮に次ぐお宮（別宮）である多賀宮（たかのみや）、土宮（つちのみや）、風宮（かぜのみや）を参拝し、内宮では、同じく風日祈宮（かざひのみのみや）、荒祭宮（あらまつりのみや）を参拝するようになつた。そして、2年ほど前からは、内宮の宇治橋を渡る前に猿田彦神社を参拝した上で内宮に向かうようになつた。いすれは、外宮や内宮の域外にある別宮（月讀宮、瀧原宮、伊雜宮、倭姫宮、月夜見宮）をも参拝したいと思つてゐる。

20年以上にわたつて参道の砂利を踏みしめ、その音を聞き、正宮に向かつて前を見つめながらも、その場から自らの人生を振り返ることは私にとってとても大切な時間となる。前回参拝した自分と今回の自分との間に流れてきた時間を振り返り、あつという間でもあり、情けなくもありながら、再び参拝できることに対する感謝の念が正宮に近づいていくことで強くなつていく。

私は、日々日記を書き綴つているが、デスクに座りながら反省の気持ちを記載することよりも、周りの風景をゆつくりと見ながら歩き進める中で人生を振り返ることのほうが違つた言葉で表現できる気がしてきた。

私は、日々日記を書き綴つているが、デスクに座りながら反省の気持ちを記載することよりも、周りの風景をゆつくりと見ながら歩き進めることで人生を振り返ることのほうが違つた言葉で表現できる気がしてきた。

このように、事務所や自宅をともに引っ越ししたことによって、私は、中央区宮の森というエリアにてどういう姿・かたちになつていくのかとでも気になつてゐる。

事務所移転に伴つて宮の森地域で時間を過ごすことが多くなつたこともあり、私は、毎朝、北海道神宮参拝を続けるようになつた。けれども、お守りをお渡ししたいといふ気持ちで思い続けた。そして、ようやく6月下旬に伊勢神宮を参拝した。お守りの気持ちをお伝えしたいと心の中で思い続けた。そして、ようやく6月下旬に伊勢神宮を参拝した。日常生活を通じて北海道神宮まで歩いて参拝するようになると、生活面でも少しずつ変化が出てくるようになつた。

20年以上にわたつて参道の砂利を踏みしめ、その音を聞き、正宮に向かつて前を見つめながらも、その場から自らの人生を振り返ることは私にとってとても大切な時間となる。前回参拝した自分と今回の自分との間に流れてきた時間を振り返り、あつという間でもあり、情けなくもありながら、再び参拝できることに対する感謝の念が正宮に近づいていくことで強くなつていく。

私は、日々日記を書き綴つているが、デスクに座りながら反省の気持ちを記載することよりも、周りの風景をゆつくりと見ながら歩き進めることで人生を振り返ることのほうが違つた言葉で表現できる気がしてきた。

これら的情景は、毎日の生活を通じ、陶磁器に釉薬を何度も塗つていくような、光沢が徐々に変わっていくような感じで様変わりしてきていくような気がする。私にとって反芻すべきことは同じことがあまりにも多い。情けなくもあるこれら同じ情景が、釉薬を塗り続けることでどういう姿・かたちになつていくのか